※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

※事務局記入欄
No. D-62

【様式２】

部門名：
校内研修プログラム開発・実践部門

エントリー名：和歌山県有田市立文成中学校・小林　紘平
平成３０年度教職員等中央研修（第１回次世代リーダー育成研修）

活動名：
職員室の熱を上げる！
授業改善を目指した職員研修の工夫

解決すべき課題：
本校は、生徒数２００名程度の学校である。そのため同じ専門教科の教師が職場にいない場合もある。また、近年若手教員が増え、ベテラン教員は減少している。教員一人一人が懸命に様々な活動へ取り組むが、ベテランから学ぶ機会は減少していることは明らかであった。本校においては、教師にとって大切なことの１つとしてあげられる授業力向上において、年齢、経験関係なく意見を交わせる場を持つことが課題であった。そこで本校では、共通のキーワードをもとに、教科の枠を越えた授業づくりを行うことで、個々の授業力の向上を目指した。この教科の枠を越えて考えることは、教員にとって、たくさんのアドバイスや自身の考えを発信できる機会になると考えた。そうすることで、若手教員の育成や参画意識の向上、ミドルリーダーの意識向上や教師間の縦のつながりの強化になると考えて研修の計画・運営を工夫してきた。また、計画・運営においては、私自身が研修の場で最後に考えた研修計画を加えながら進めるように意識してきた。

目標・方針：
昨年度までの研究の成果と課題から、研究部で今年度の研究テーマを焦点化し、職員全体で共有した。また、それに向けて個々がどのような取り組みを進めていけるのかを考える機会を設け、個々の具体的な取り組みを誰でも見られるように職員室へ掲示をした。各研修会ごとに研修会のまとめ通信を発行したりすることで、意図的に職員室内で授業づくりに対する話し合いが起こるようにした。

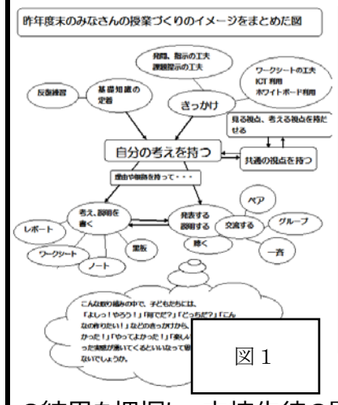


図１

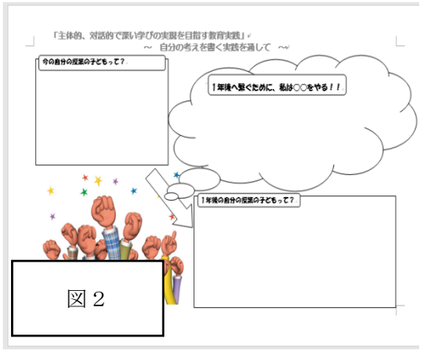


図２

活動内容：
年度当初に、昨年度の成果と課題から生まれたキーワード（図１）を確認するとともに、研究テーマを全員で共有した。今年度の研究テーマに対して、自分はどのような取り組みを行うのか、具体的にワークシートへ書いてもらい(図２)、全員の取り組みが、誰でもいつでも見られるように職員室内に『私は今年「これ」を頑張ります』という掲示物を作成し掲示した(図３)。全国学力・学習状況調査終了後には、自校分析の結果を把握し、本校生徒の間で誤答が多かった問題や、和歌山県全体の状況を伝えるために、朝の打ち合わせ時に、「突然ですが、この問題解けますか。答えは、明日の朝に机上へ配ります。」のコメントを添えて、全職員の机上に問題を配布し、教科の枠を越えて本校生徒が抱える問題に目を向けてもらえるように工夫をした。また、夏期には、図２の経過報告会を設けた。この研修会では、年齢別の３グループ（４人）で話し合いを行った。発表時間や記録者は、前もって知らせており、当日に余計な説明を行わずに話し合いを進められるようにした。また、同日、理科の研究授業に対しての授業案検討会を後半に行った。

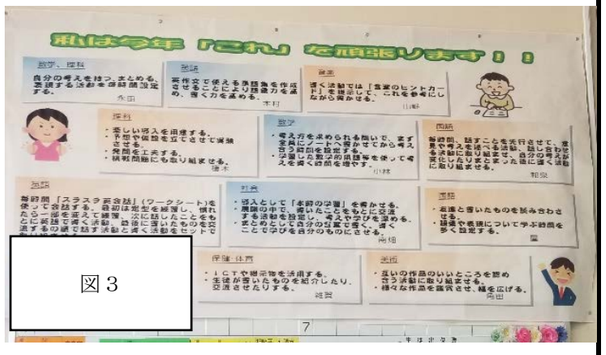
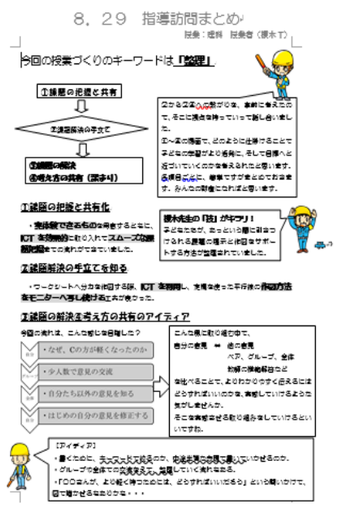


図３

検討会は、職員の数も少数のために全体で話し合いを進めた。その中で出てきた内容をまとめ、当日の授業を参観する視点として活かすようにした。研究授業当日の協議会での内容は、後日通信の形(図４)として発行することで、話し合いの流れを再確認してもらえるようにした。第１回次世代リーダー育成研修後、自身の研修運営方法について、若手教員や同世代の中堅教諭などに相談するとともに、その後の研修の運営方法を変えていくように、先生方のニーズを大切にするように心がけた。本校では、教科の枠を越えて考えるために、道徳の授業づくりの検討会を毎年全職員で行っている。その検討会は、各学年からの授業提案を３日間に分けて行った。前もって、学年ごとの提案日を決定し、それに向けて各学年で展開例を作成した。当日は、4～5 人編成のグループ活動から始めた(図５)。提案する学年の担当者が、各々のグループで発表し、それに対しての助言や意見を出し合った。そうして考えた道徳の授業を１月から２月にかけて公開し、その都度、協議会で「更に、よくするためにはどうすれば良いか」という前向きな視点で授業を振り返った。こうした、研修を繰り返し、年度末の振り返りとして、図２で考えたことにどのように取り組み、どのように子どもたちに変容が現れたのかをまとめた。また、次年度の研修をより効果的なものにするために、本年度の研修の進め方についての意見を集約しまとめた。



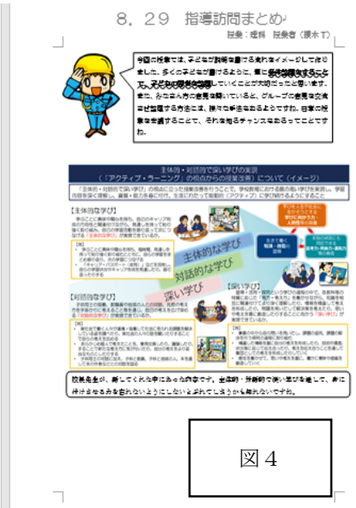


図４

図５

活動の成果：　※課題設定に対して、どんな影響、変化あったか、参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

中央研修後に意識した参加者のニーズを把握すること、研修をコーディネートするための事前の下準備などの運営方法を工夫することで、校内研修後の職員室内での会話に、校内研修の時の内容が飛び交うようになった。そして、研修後だけでなく、一緒になって考えたことがどれくらい達成できたのか、興味を示してくれる人が出てきている。また、教科の枠を飛び越えて授業を考えることで、前述の内容以外に、授業を参観する際の視点がみんな同じになり、協議会をよりスムーズに進められるとともに、話の内容も焦点化しやすくなった。

アピールポイント（アイディアや工夫）：※3～5 つ程度、箇条書きしてください

教科の枠を越えた授業づくりを考えるにあたって、道徳の授業づくりは全員が参加しやすく良い例であると思われる。また、道徳の授業をつくる時の「ねらいや主発問」の考え方や展開時の教師の技は、自身の教科へとつながるものがあると実感できる。こうした道徳の授業づくりと、教科の授業づくりを混ぜながら考えることで、教科が違えど同じ視点で考えられることがあることに気づける。この気づきが職員室での会話につながるように、研究通信や生徒の目にも見える掲示は効果的であったと思われる。また、問題形式のプリント（例：全国学力・学習状況調査の分析で考えて欲しい問題を本校の生徒の正答率とともに提示する。）を置くことで、近くの先生方と共通の話をするきっかけになり、自分の空いた時間でできるため興味を持ってもらうには効果があったと思われる。